

第一章

(一)

「いまの俺は爆弾だ——額の汗を袖口で拭いながら、東口太一は胸の内では呟いた。しかし問題はそれよりも、隣でニコニコしている人の良さそうなこの老婆が、その事実をまったく知らないという点だった。

「ああもう、出来上がりが本当に楽しみ。だってこれ、引き出しがすんなり出てくるようになるし、見た目もピカピカに戻るんでしよう？」

「単箭の修繕を依頼してきた老婆は、皺くちやの顔を皺くちやにして屈託なく笑っている。

「おまかせください。ピカピカのしつとりです」

「しつとり」

「こうした古い家具は古色も大事にしながら直すんです。せっかくの貫禄を消してしまわないように」

「あたしがお化粧するみたいなものだわね」

「はい——いえ」

「いいのよ」

笑つて誤魔化し、東口は台車を引いた。載せた箆笥を門柱にこすらないよう気をつけながら、日盛りの路地へ出る。九月初めの太陽は、まだまだ脳天に突き刺さるようだ。

長年使いつづけた箆笥に寄り添うように、老婆もついてきた。

「あの……もういいですよ、ここで」

何故なら俺は爆弾だから。

「最後まで見送るわ。ところであなた、おいくつ？」

「今年で四十になります」

「あらま、お若い」

えっと思つたが、どうやら若く見えるという意味ではなかつたらしい。

「もうちょっと上かと思つたわ。うっふ、ごめんなさいね」

「まあ、これでなかなか苦労も多いもんで、皺が最近」

「あらやだ、そんなのまだ皺じゃないわよう」

老婆は東口の肩をぶつ叩くような仕草を見せたが、幸いにして素振りだった。いま身体に刺激を加えられるのがどれだけ危険なことを承知していたので、東口は心底ホツとした。その瞬間にうっかり括約筋をゆるめてしまい、素早く締めなおす。締めたまま、塀に寄せて停めてあるトラックへと台車をじりじり引いていく。

「ねええ」

ちようどミドソくらい音階で、老婆が可愛らしく言う。

「ちよつとだけ、お待ちになっていてくださる？」

「は」

「ちよつとだけ、ね」

よちよちと歩き、老婆は玄関のドアを入れていってしまつた。まずい——限界に近い。東口は歯を食いしばって台車を引きつづけ、トラックの幌ほろを手早くひらくと、冷や汗と通常の汗を同時にかきながら箆筒を荷台に積み込んだ。

「お待たせ」

やつと老婆が戻ってきた。右手にポチ袋を持っている。

「これ、ビール代にでもしてちょうだいな」

「いえ、社長に叱しかられますので」

「平気よ、ほら持つてって」

「はうっ！」

ポチ袋を無理やりつなぎのポケットに入れようと、老婆は腹に手を押しつけてきた。

「どうなすつたの？」

「いえ……何でも」

震える手でポチ袋を受け取り、怪訝けげんそうな顔の老婆にぎくしゃくと挨拶して、東口は運転席

に乗り上がった。エンジンをかけ、ギアをローに叩き込んでアクセルを踏むと、助手席に座っていた老人が青白い顔を向ける。

《何が社長に叱られるだ……社長はお前じゃないか》

「いいんだよ」

《見栄か》

「うるせえ」

《ちつぽけな虚栄が、往々にして人間の一生を破滅させる大きな力になることもある》

「小幡欣治、戯曲家」

《ご名答。ところで、お前はまた笑い方が変わった》

「そうかい」

《卑屈になった》

「商売用だ」

カーブでハンドルを切り、さらにアクセルを踏み込む。老人は真っ白な顎鬚あごひげをゆるゆるとし、ごきながら、じつと東口の顔を眺めている。

《もれそうなのか》

「土俵際だ」

出掛けに食べてきた饅頭まんじゅうに違いない。三日前に客の家でもらったものを、トラックの中に隠しておいたのが失敗だった。せめてアパートの涼しい場所にも置いておけばよかったのだ

が、下手をするとな誰かが食べてしまう可能性がある。ジジタキさんあたりが、こつそり。

《大変だな……人間ってのは》

哀れむように呟く老人を無視して、東口はアクセルペダルを踏み込んだ。荷台にロープで固定した簞笥がギリギリ倒れないほどのスピードで角を折れ、すぐそこにあるスパーの駐車場へトラックを滑り込ませ——いや駄目だ、車が多くて空いているスペースが見当たらない。咄嗟の判断で東口は駐車場の入り口を過ぎ、そのまま路肩に車を停めた。運転席を飛び出してスパーの入り口を駆け抜け、すぐ左手にあるトイレの個室へと突入し、高速の脱皮のようにつなぎを脱ぎ捨て、

「おお……!!」

爆発は、尻を出すのとほぼ同時だった。

溶けるような安堵の中、ふと思いついて上体を屈め、つなぎのポケットを探ってポチ袋を取り出してみた。厳しいこのご時世、ときおりこうしてチップをくれる客がいるのは本当にありがたいことだ。

「銅……いや、銀メダルとみた」

五千円札を予想しながらポチ袋を覗いたが、つぎの瞬間「いつ」と首を突き出した。中に入っていたのは紙幣ではなく、ただのメモ紙だったのだ——『うちの簞笥を宜しくお願い致します。これでビールでもどうぞ』。

どうやら金を入れ忘れたらしい。

「かああ……」

東口は便器に座ったまま首を垂れた。まさか客の家に戻って金の話をするわけにもいかない。落胆に肩を落としながら尻を拭き、傍らにあるウォシユレットのボタンを押すと――。

「ふっ！」

怖ろしいほどの勢いで下から水が噴出した。水勢を調節しようと、慌てて「弱」のボタンを押すが、どうしたことか水は一向に弱まらない。もう一度押すが変わらない。強く押しても変わらない。連打してみても変わらない。

「壊れてやがるっ」

しかも壊れているのは「弱」ボタンだけではなかった。「止」を押したが何も起きない。指を叩きつけるようにして押し込んでみるが、それでも止まらない。そうしているあいだにも水はレーザー光線のように尻を突き刺しつづけている。立ち上がって逃げ出すこともできなかつた。何故ならいま尻をどけたら、水が天井に向かって飛び出すことになるからだ。全身から血の気が引いた。細く鋭い錐きりのような水流が、いまにも尻の皮膚を破壊して突き進み、内臓に穴をあけ、何か取り返しをつかないことになってしまうのではという想像が脳裡のうりに広がった。大声で助けを呼ぶべきか、それとも上手いこと尻の下に手を入れ、その手で水を受け止めつつ身体を起こし――しかし、そのあとどうするとうのだ。恐慌をきたした東口は操作パネルのボタンをでたらめに押した。全部押した。水は止まるどころか、ちよつとだけ強まった。「強」のボタンだけ生きていたらしい。

が、そのとき天啓てんけいが降りた。

「コンセント！」

上体をひねって背後を見ると、ウォシユレットの脇から電源コードが延び、壁の差し込み口にささっている。すぼめた肛門で水を受け止めたまま、精いっぱい右手を伸ばしたら、なんとか指先が少しだけコードに引っかかった。掴つかもうとした。滑った。二度目で掴めた。引いた。抜けた。水が止まった。

「……ちくしょう！」

ぐったりと背中を丸め、両足を引き摺ずりながら個室を出ると、誰もいないとばかり思っていたのに、そこには小学校低学年くらいの少年が立っていた。ぽかんと口をあけてこちらを見ている。隣に父親らしき男もいた。父親は息子の肩に両手を添え、見ちゃ駄目だよとも言いたげに自分のほうへ向き直らせた。

「……ちくしょうめ」

トラックに戻ると、右のサイドミラーが曲がり、鏡に鱗ひびが走っていた。

「誰か、ぶつけていったのか」

力なく運転席のドアを開け、助手席の老人に訊いてみる。

《ああ、そうらしいな》

力の入らない両足から、さらに力が抜けた。

東口はミラーをぐっと元の位置に戻した。いや、戻らなかった。金具がひん曲がってしまった

ている。それでもなんとか後方を確認できる位置には固定できたので、適当なところで諦めて運転席に乗り込んだ。溜息まじりにイグニッションキーを回すと、助手席の老人が退屈そうに、白い顎鬚をもてあそんでいる。

《相変わらずだな》

「いいかげん慣れたよ」

この老人と出会ってから、毎日がこうだ。自分の人生からはあらゆる幸運が一掃され、不運だけが残されている。

「なあ、俺さ——」

少々ぐらつくサイドミラーで後方を確認しながら、トラックを発進させた。

「ずっとこうなのかな」

老人は答えなかった。ちらっと顔を見やると、垂れた目尻のあたりをぼりぼり掻きながら、フロントガラスの先をぼんやり見ている。ずいぶん経って、東口が忘れかけた頃に、やっと言う。

《自分で考えろ》

荒川を越える手前で携帯電話が鳴ったので、道路交通法を無視して出てみた。

「お電話ありがとうございます。家具の製作と修理、東口家具でございます」

電話は椅子の修理依頼だった。チラシを見て、かけてきたらしい。

「ああ座面の布地が——ええ古くなって——ほう汚れも——へえなるほど。今日はこれから？

「あ、お忙しい。では明日お伺いします。新しい布のサンプルを、そのときにお持ちして、ええ」

先方の名前と住所と電話番号を膝の上でメモし、通話を切った。どうだという顔で隣の老人を見ると、鼻で嗤われた。

《座面の交換など、一脚千円の安い仕事じゃないか》

「一人の食い扶持にはなるだろうが」

《いつまでも一人では仕方がない》

「いいんだよ、なんたつて俺はホームレスなんだから、自分だけ食えりゃ十分なんだ」
カーラジオをつけたが、電波が悪くてどこも入らなかった。

赤羽の住宅地でチラシを配り、住处であるスクラップ置き場に戻った頃には、初秋の太陽は
ずいぶん傾いていた。

「ああヒガシさん、お帰り」

敷地の隅で水道を使いながらしゃがみ込んでいたジタキさんが、肩越しに笑顔を向ける。
山と積まれたスクラップたちが夕陽を受けて、腐食した表面を光らせている。

「あれ、なんだジタキさん、仕事は？」

「今夜はあぶれた。警備員もさ、需要がどんどん減っちゃって」

「やっぱりそうかい」

「そんでほら、やっぱし若い人らを優先的にとるんだよ」

ジジタキさんはキユツと水道を止め、瘦せて無精髭ぶしょうひげの生えた頬をぱしんとやる。

「こんな爺さんじゃ、悪者を追っかけんのも難しいもんなあ」

「経験だよ、経験。どんな仕事だつて」

「いやまあ、そうは言ってもさ」

ジジタキさんは長年、警備の派遣会社に世話になっている。たしかタキザワだかタキガワだかという名字なのだが、彼がこの場所へ流れてきたとき、たまたまタキさんというあだ名の男がすでにいて、ジジタキさんになったそうだ。そのタキさんのほうには、東口は会ったことがないが、いまでは郷里の島根県で墓の下にいと聞く。あるときこのスクラップ置き場で胸を掴んで倒れ、その夜に病院で死んだらしい。福祉団体がさんざん手間取った末に家族を見つけて連絡をし、兄だという人が遺骨を引き取りに来たそうだ。

——それが、あからさまな迷惑顔でさ。

ジジタキさんが以前に話してくれた。

——あれじゃ、ほかのホームレスたちみたいに、無縁仏にしてもらったほうがよかったよ。

「ん、なんだその茄子なす」

見ればジジタキさんの尻の後ろには筴さるが置かれ、Cの字に曲がった茄子が山盛りになっている。

「バーベキューだよ。今夜みんなでバーベキューやろうつて話になったんだ。向こうで畑やっ

てる、ほらあの頭真つ白な婆さんがさ、ナスビとかモロコシとか、たくさん持ってきてくれて。自分じゃ食べきれないからって」

「へへえ、茄子とトウモロコシと——？」

「シシトウとカボチャ。それからウナギ。いま向こうで、チュウさんたちがウナギ釣ってるんだ。蒲焼きだつてさ」

スクラップ置き場の奥、左右に延びるコンクリートの堤防を、ジジタキさんは顎で示す。堤防の手前には、ブルーシートの小屋が三つ並んでいる。トラックを持つている東口以外はみんな、ああした小屋で寝起きしているのだ。そこはスクラップ置き場の土地よりも一段高く、コンクリート敷きになっているので、雨が降ってもぬかるむことがない。ホームレスの小屋といっても馬鹿にできるものではなく、中はそれぞれちゃんと採光の工夫などが施してあるし、間取りもなかなか凝っている。小屋全体を覆うシートもつぎはぎではなく、桜の時期に上野公園の花見客と交渉してもらってきた大判のものを使っているので、雨漏りも滅多にしない。室内には小型のテーブルや座椅子。造花の入った花瓶。読書が趣味のジジタキさんなど、小屋の端に東口が廃材でつくってやった本棚を置き、古紙回収の日に少しずつ集めた小説をずらっと並べていた。ジャンルへのこだわりもあり、蔵書の中でとくに多いのが中国の戦史もので、吉川英治の『三国志』も全巻揃っている。

「そう上手くウナギが釣れるかね」

「釣れるよ、チュウさんだもん」

チュウさんは東口より少し年上の四十代半ばで、本名を根津ねづという。「み」をつけてネズミだからチュウさん。そして、糸切り歯から奥歯にかけて虫歯がひどく、前歯だけが白く目立っているからチュウさんだ。夫婦者で、奥さんのトキコさんと二人で廃品回収をしている。仕事をしたくないときは堤防の向こうに椅子を並べ、いつも二人で釣り糸を垂れている。そうして荒川から食料を釣り上げては、自分たちで食べたり、みんなに分けてくれたりするのだ。釣り道具はすべてどこから拾ってきたものらしいが、こんな仕掛けでどうしてというくらい、よく釣れた。ただしそれはチュウさんだけで、トキコさんはいつもボウズだ。役に立てなくて恥ずかしいと、トキコさんはすきつ歯を見せて笑うけれど、堤防の向こうで釣り糸を垂れるチュウさんの隣にトキコさんがいないと、やはり不自然な気がするし、チュウさんの針に魚が引っ掛かるのも、隣に寄り添っているトキコさんのおかげなのかもしれない。理屈は通らないが、なんとなくそんな気がする。

「そっちはどう、ヒガシさん、今日の仕事は」

「箆笥の預かりが一件と、椅子の修理依頼が一件だけだね。あとはまたチラシ撒まいてきたから、反響待ちだな」

「じゃんじゃんかかってくるといねえ」

近くにある製紙工場の植え込みからだろう、ヒグラシが透明な鳴き声を響かせた。ジジタキさんがその声のほうをちょっと見て意味もなく頷くと、地面に伸びた長い影も首を揺らした。ジジタキさんはいつもきちんとワイシャツを着て、ストラックスを穿はいている。ただアイロン

は持っていないので、每晚寝押しで布地を伸ばしていて、近くで見ると細かい皺が寄り、全体に黄ばんでいた。

東口がここへ来たのは二年前だ。

当時、訪問販売のかたちで家具修理の注文をとりながらトラック暮らしをしていた東口が、たまたまスクラップ置き場の前を通りかかったのがきっかけだった。敷地の隅に金属クズがこんもりと積まれ、その脇で、数人の男女が一脚の椅子を囲んで何か言い合っていた。それはチユウさんが釣りのときに使っている椅子だったのだが、もちろんそのときは知らなかった。屈んで下を覗いたり、両腕をTの字にして何やらジェスチャーで説明している者もいて、椅子の脚がぐらついているのを、彼らがなんとか直そうとしていることが遠目にもわかった。東口はトラックから降りて手を貸してやった。

以来、東口は彼らの仲間入りをしたのだ。

住人は現在全部で五人。ただし数はいつも、増えたり減ったりしている。

このスクラップ置き場の持ち主は橋本はしもとという、独り身で初老の男性で、敷地に隣接したぼろアパートに住んでいる。そのアパートの大家も橋本がやっていて、一階にある五畳一間の一室を、ここに暮らす仲間たちが共同で借りていた。といっても実際に住んでいるわけではない。風呂やトイレのため、また住民票を取得したり郵便物を届けてもらったりするために使っているのだ。とくに住民票は大事で、これがあるのとないのでは生活がまったく変わってくる。じつさい東口なども、以前は飛び込みで家具の修理を請け負っていたのが、いまではチラシを

撒いて携帯電話で仕事を受けられるようになり、受注件数も収入も格段に増えた。といつても住む部屋を借りられるほどではないが。

橋本が経営していたスクラップ工場は、もう十年近く前に潰れて^{つぶ}いる。工場は敷地の隣、アパートと反対側に建っていたのだが、いまは均^{なら}されて月極駐車場になっていた。スクラップ置き場のほうは橋本が処理を面倒がり、そのまま放置していたので、いつしかこうしてホームレスたちのたまり場となったのだ。それを迷惑がるどころか、ときおりやってきては一緒に飲んで酒を飲んでくれたりする変わり者の橋本に、この連中はみんな感謝していた。アパートの部屋を共同で借りるといふのも、そもそも橋本が提案したことらしい。

——流行^{はや}りのルームシェアだよ。

アル中気味の橋本は、酒臭い息をはずませて楽しそうに言ったそうだ。

「ヒガシさん、まだ切るの早いかなあ、このナスビ」

「あんまり早く切ると、色が悪くなるよな」

「俺ちよつとウナギ見てくるよ。釣れてるか」

「俺も一仕事したら覗きに行くわ」

堤防へ向かってのろのろと歩いていくジジタキさんの背中を、東口はなんとなく目で追った。堤防の壁には、梯子^{はしご}のようにコの字の鉄が打ち込まれていて、それを上れば向こう側へ行ける。チユウさんたちはそこで釣りをしているのだ。

「や、と」

トラックの幌をひらいた。預かってきた箆筒の状態を点検しておかなければならない。ヨット荷台に飛び乗り、天井からぶら下がった白熱灯のスイッチを入れると、「東口家具」の侘びしい全貌が浮かび上がった。

正面奥に生活用品の詰め込まれた段ボール箱。丸められた布団。十二Vのバッテリーが二つと、十三インチのブラウン管テレビ。地デジ化されるまでは、あのテレビで放送も見ていたのだが、いまではビデオを再生するときにしか使えない。そしてVHSのビデオデッキ。洗面用具。右側には種類分けして積まれた木材。反対側には木製棚。棚の中には家具の修理に使う材料や薬剤や塗料、使い込まれた工具たちが詰め込まれている。

「ヒガシさんいる？」

幌の向こうから首を突き出したのは芹沢せりざわさんだった。芹沢さんは東口たちが共同で借りている部屋の隣で暮らしている、二人の小学生の娘を持つ肝っ玉シングルマザーだ。

「ああ、いたいた。ちよつといいかしらね、これ見てもらって」

丸々とした両腕で芹沢さんが持ち上げてみせたのは、寝ぼけたような灰色の、肘掛ひじかけのついた座椅子だった。

「うちのじゃないんだけどね、アパートの裏のほら、おばあちゃん、一人暮らしの。あの人が、この椅子に染みつけちゃったって言うもんだから、預かってきたのよ。知り合いに、そういうの上手に消してくれる人がいるからって」

「どれ」

座椅子を受け取り、芹沢さんが指さしたあたりを電球の光にさらしてみた。右の肘掛けの端が、ちょうどひょうたんみたいな形に黒ずんでいる。布巾か何かでこすつてとろうとしたのだから、輪郭がぼやけていた。鼻を近づけてみると、微かに甘辛いにおいがする。

「煮物か何かの汁だな、これ」

「ねえ、そんなにおいするわよねえ。なんか、嗅いでるとお腹すいてきちゃう」

「ちよつと待つてな」

棚からシェービングクリームの缶を取つてくると、芹沢さんは怪訝な顔をした。

「こいつが一番いいんだよ、こういう染みには」

缶を振り、シュッと親指の腹ほどの泡を出して染みの上に乗せる。ちよつと待つてから布で拭き取り、また泡を載せ、ちよつと待つて拭き取る。三回ほどで染みは消えた。見せてやると、

芹沢さんはへええと感心し、東口の全身をよく見ようとするように上体を引いて顔を向けた。

二重顎が三重になった。

「細かい泡なら何でもいいんだ。弾けるときの力で汚れが浮き出てきて、それを拭き取る。ほら泡風呂とか、身体洗わないでも勝手に綺麗になるだろ」

「入ったことないわ、泡風呂なんて。ね、でもどうして髭剃りの泡が一番なの？」

「安いからね」

「おばあちゃん、喜ぶわ」

「よろしく言つていて」

芹沢さんはふくふくと笑い、座椅子を持って歩き去った。

「あそうだ、バーベキューやるってさ、夜」

芹沢さんは振り返って「え？」と訊き返したが、東口が言い直す前につづけた。

「ああ……夜はねえ、娘たちとご飯食べないと。あたしだけ出てくるわけにはいかないからねえ」

連れてくればいい——と言いかけて、危ういところで言葉を呑んだ。偏見のかけらも見せず、こうして東口たちと気軽に付き合ってくれているのは、芹沢さんの善意だ。甘えすぎではない。ない。

しかし、東口が呑み込んだ言葉を芹沢さんは察したらしい。椅子に目を落として頬だけで微笑った。

「夜だし、娘たち連れてくるのも、あれだものね」

「夜遊び憶えちゃ、まずいもんなあ」

「ねえ」

「そう」

夕陽の路地へ、芹沢さんはゆっくりと出ていく。

シェービングクリームを棚に戻し、東口は荷台の奥へ向かった。老婆から預かってきた大きな箆が、ロープで固定してある。そのロープを解き、東口はくたびれた箆の状態を確認していった。

「なかなかこりや、直し甲斐がある」

表面のところどころ——とくに引き出しの前板に、細かい傷がたくさんついていて、取っ手の錆やぐらつきも目立つ。それでも、老婆がこの箆笥を大切に使いつづけてきたことはわかった。全体の佇まいから、伝わってくるものがある。

「ん」

引き出しに何か入っている。

《写真だな》

いつの間にか、老人が横から青白い顔を寄せていた。

東口は頷いて写真をつまみ上げた。し判のカラーで、右下に「1992 08/16」と入っている。二十二年前だ。夏祭りだろうか、たくさんの浴衣姿。背景に夜店の日よけが写り込み、画面の真ん中では、青い甚平を着た男の子が、頬を上気させて得意げにピースサインを突き出している。

《ちょうど、同じ年頃だな。お前の息子と》

「かもな」

《五歳くらい……六歳にはなっていない。小さな手だ。指が短くて可愛らしい》

「ああ」

《子供というのは、いつピースサインをおぼえるのだろうか。お前の息子も、カメラを向ければ必ずこのポーズをとっていた。ちよっと顎をそらして、得意そうに、しかし頬のあたりに照

れくささが浮かんでいて——》

「もういいよ」

東口が遮ると、含み笑いをして老人は黙った。
それきり何も言わず、気づけば消えていた。